

スポーツ観戦者における人間的成長とは

1210481 筒井 空

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 概要

見るスポーツにおいて、観戦者とは主体的な作業を通して人間的成長をするものだ。しかし、見るスポーツにおける人間的成長という概念の解明はいまだ不十分である。

そこで本研究では、アマチュアの試合を観戦した6人を対象にインタビュー調査を用いて、スポーツ観戦とはどのような意味において観戦者の成長のきっかけになりうる機会なのかを明らかにした。その結果、4つの人間的成長のきっかけのパターンを発見することができた。

2. 背景

スポーツ庁は、人々がスポーツの力でより人生を楽しく健康的なものとするために、スポーツに対して「する」「見る」「ささえる」といった多様な関わり方での、スポーツ参画人口の拡大を目指している【1】。実際に、見るスポーツには観戦者が観戦を通じて、人生を楽しく健康的なものにする力があるとされている。

齊藤(2009)では、見るスポーツにおいて観戦者とは目の前のゲーム現象を単に見るだけではなく、自己の享受能力(味わう・楽しむ・自分のものとする能力)を用いて、プレイヤーがどのようにプレイしているかや、緊張などの心理状態といった、パフォーマンスを分析して、観戦に意味を与えるという、主体的な作業を通して人間的成長をするものとしている。そのため、観戦者を単なる傍観者として捉えてしまうと、見るスポーツが更なる発展へ向かうための議論ができない。また、享受能力を活かした人々の人間的成長とは、学校教育(保健体育)における、「学習者がそれぞれの運動に有する特性や魅力に応じて基礎的な身体能力や知識を身に付ける」ことと似ているとされている(筆者要約)。

しかし、トップスポーツやプロ選手に対するマスメディアの扱いや、スポーツの日常化・娯楽化が進んだことで、観戦者がスポーツに対する単なる傍観者にされてしまったと述べている【2】。

このような先行研究を参考にし、本研究では見るスポーツにおける人間的成長に着目して研究を行う。

3. 目的

本研究では、見るスポーツにおける人間的成長という概念の明晰化を目的とする。なお、具体的には以下のリサーチクエスチョンを明らかにする。

Q: スポーツ観戦とは、どのような意味において観戦者の成長のきっかけになりうる機会なのか

4. 研究方法

4-1 調査方法

日本トリム杯(高知オープン卓球選手権大会)を対象に、「試合を行っている時間は10~16時で、その間であればいつ来てもいつ帰ってもいい。参加日もどちらか一日で大丈夫」と、筆者自身の知り合いや同じ研究室の人15名程度に呼びかけ被験者を募集した。その結果、6名の参加者が集まった。被験者の性別・年齢・過去のスポーツ経験などは様々で、筆者の知り合いもいればそうでない人もいた。そして、実際に試合を観戦してもらい、後日インタビュー調査を行った。インタビューでは、当日の流れや印象に残ったことなどを中心に深く掘り下げた。その後、書き起こしを行い、被験者にとって、最も印象に残った瞬間と、なぜその人にとってそのことが印象的であったかという解釈の手掛かりになるような出来事を並べて物語を作成した。そこから、リサーチクエスチョンを明らかにした。

4-2 大会の概要

大会の詳細については以下のとおりである。

大会: 日本トリム杯 高知オープン卓球選手権大会

日程: 2019年12月21・22日

大会1日目団体戦・2日目個人戦

協賛: 株式会社日本トリム

出場者層: 高知県民を中心に全国からの参加者

小学生～高齢者の方

招待選手：関西のトップレベルの学生

日本一の実業団チーム

プロ選手 1 名

出場者数：団体の参加チーム(81 チーム)

個人戦の出場者数(339 名)

4-3 被験者の概要

被験者の詳細は以下のとおりである。

被験者[1] Aさん(男性)

所属：高知工科大学 3 回生

日時：2019 年 12 月 23 日 (約 60 分)

被験者[2] Bさん(女性)

所属：高知工科大学 1 回生

日時：2019 年 12 月 25 日 (約 60 分)

被験者[3] Cさん(男性)

所属：高知工科大学 3 回生

日時：2019 年 12 月 25 日 (約 30 分)

2020 年 11 月 11 日 (約 10 分)

2020 年 11 月 12 日 (約 10 分)

2020 年 11 月 19 日 (約 10 分)

被験者[4] Dさん(男性)

所属：高知工科大学 3 回生

日時：2019 年 12 月 25 日 (約 60 分)

被験者[5] Eさん(男性)

所属：高知工科大学 3 回生

日時：2019 年 12 月 26 日 (約 50 分)

被験者[6] Fさん(男性)

所属：高知工科大学 3 回生

日時：2019 年 12 月 26 日 (約 50 分)

5. 結果

以下がそれぞれのインタビュー内容を基に作成した物語である。なお、物語中の「私」とは筆者のことである。

5-1 Aさんの物語

3 年生のある日、私から研究の協力願いのメールが届いた。私とは 1 年生の時、ドミトリーで同じ階になり仲良くなった。2 年生になってからは、お互いにドミトリーを退寮したが、た

まにご飯を誘っていた。しかし、毎回私からは「部活があるから」と断られていた。そんな経験から、毎日私が練習していることも知っていたため、私が試合している姿を「1 回くらい見たいなあ」と思っていたので、研究に協力することにした。

試合当日、会場に着いて観客席に上がると 1 番最初に私の試合が目についた。ドミトリーの同じ階だった共通の友達にも見せてあげようと思い動画を撮った。そして、観客席に座ってしばらく私の試合を見ていた。「やっぱ毎日練習してるだけあるなあ。」私のプレーを見てそう思った。私は対戦相手に勝利したが、団体戦であったため、後が続かず私のチームは敗退した。

私の試合が終わり他の選手の試合を見始めた時、1 人の選手に目がいった。Aさんはバドミントンをしているのだが、その選手は体幹もしっかりしていて、体のつくりが良く、バドミントンをしていてもトップレベルにいるような選手だと思った。しばらくして、私が観客席の方に上がってきた。そして、試合のことや他の選手のことを色々教えてもらっていた。すると、先ほど注目していた選手が関西のトップレベルの選手であることを知った。Aさん自身、過去に関西のトップレベルの選手に完敗した経験があったため、「やっぱり強いんだなあ」と思った。

その日の試合はまだ続いていたが、私の試合を見ることもでき、関西のトップ選手も見ることができて満足したので、帰ることにした。しかし、Aさんは何かに対する名残惜しさを感じていた。それは、その場にまだ居たとしても見ることでいい、私の試合に対する名残惜しさだった。「空(注：筆者のこと。)の試合がもう少し良かったなあ…」私のチームの敗退により名残惜しさは感じていたものの、それと引き換えに別競技でもトップ選手に共通する点を発見できた 1 日であった。

Aさんは今回の観戦を通じて、別競技でも共通する認識を見出すことで、自身がどのような強みや特徴を持った人間なのかを理解することができたと考えられる。

そのため、Aさんにとってスポーツ観戦とは、「アスリートとしてのアイデンティティの強化」のきっかけになりうる機会だった。

5-2 Bさんの事例

高校時代サッカー部に所属していたBさんは、スポーツ全般やることも観ることも好きだった。大学に入りフットサルのサークルに入った。バイトをしながらフットサルを楽しむ日々が続いていた。バイト先で工科大(注：高知工科大学)の卓球部の人と知り合う。話を聞いていると卓球部はみんな仲が良いことが分かった。それから数ヶ月経ったある日、バイト先で出会った卓球部の人から1通のメールが届く。「卓球の試合観戦に来ませんか」という内容だった。その日は予定もなく、興味もあったので行くことにした。

そして、試合当日、会場に入ったBさんはある試合が目映る。それは工科大生同士の試合。その2人の仲がいいことを知っていたため「あった時はどういう感じで試合するんだろう」と思った。

Bさんは高校時代、試合で仲の良い友人と対戦した際に試合後の関係を恐れ、手を抜いてしまったり友人とのマッチアップを避けたりしてしまったことがあった。そんな過去の記憶が甦り、同チームの2人の対戦からは目が離せなかった。実際にその2人は、1球も手を抜くことなく、点を取れば声を出し、真剣に勝負していた。

大会はまだ続くが会場を後にしたBさん。この日、試合観戦終わりに自身のフットサルサークルに行かなければならなかった。2人の熱い試合を見たBさんは車を運転しながら「私ももっと頑張ろう」そう思いながらフットサル場へ向かった。

Bさんは今回の観戦を通じて、過去の自分と向き合ったことで、スポーツにおける真剣な場面では日常の人間関係を隅においてでも、相手に敬意をもって戦いに尽力することの尊さを学ぶことができたと考えられる。

そのため、Bさんにとってスポーツ観戦とは、「敬意を持ち対戦相手と向き合う尊さを学ぶ」きっかけになりうる機会だった。

5-3 Cさんの事例

Cさんには大学1年生のとき、仲の良い友人がいた。その友人は卓球が好きだったが、「周りが強すぎるから」と卓球部には入っていなかった。そんな友人と歩いているときに、卓球部の人とすれ違うと、卓球部の事やすれ違った人の名前や強さを教えてくれていた。そうしてCさんは、卓球部の練習の厳しさや、同級生の子たちを知るようになった。

「卓球の人や。」3年生になったとき、卓球部の1人(注：私)と研究室が同じになった。Cさんは、私と話していくうちに、地元が同じであったことや、私のバックボーンを知り、卓球部の一員というイメージが強かったのが、次第に1人の友達と思うようになっていった。そんなある日、Cさんの元に私から今回の研究の協力が届いた。1年生の頃から知っていて、3年生になって友達になった私の試合を見てみたかったので、協力することにした。

試合当日、家から会場までの距離は片道7キロ近くあったが、歩くのが趣味なCさんは歩いて向かった。遠い距離ではあるが、まだ行ったことのない場所を歩く楽しさと、歩いた先にある私の試合への楽しみの2つが掛け合わさって、しんどさはあまり感じられなかった。

Cさんは試合会場に着いたが1番楽しみにしていた私の試合がなかなか始まらなかった。違う選手の試合のコールがされるたび、まだかまだかとじらされていた。そして数十分経ち、ようやく私の試合のコールがされた。「ようやくきたか。」Cさんはコールが聞こえた時そう思った。待ちに待った私の試合を見始めたが、思い描いていた私の姿を見ることはできなかった。私は序盤から相手にリードを許していて、点差も4-7と不利な状況だった。対戦相手のことを全く知らなかったCさんは「絶対負けるやん(あの筒井くんが負けている、相手が強いのだろう)」そう思った。しかしそこから、私のプレーがポイントに繋がり始め、点差はあつという間に縮まっていった。「おーきたきた！エンジンかかってきてるやん！」そして、私はポイントを連取して点数も8-7と逆転した。そのまま1セット目を取った私は3-0で相手に勝利していた。「俺が見たかったのはこの筒井くんや！」Cさんが7キロ歩いた先に、あったはずの喜びを確かに感じた瞬間だった。

Cさんは今回の観戦を通じて、2つの状況(日常と試合)の中でも、他者の一貫性を見出し、その人物の理解を深めることができたと考えられる。

そのため、Cさんにとってスポーツ観戦とは、「他者の本質を理解する」きっかけになりうる機会だった。

5-4 Dさんの事例

卓球経験者のDさん。大学では部活動には所属していないが、卓球クラブでバイトをしたり、地域の大会などにも出場し

たりして、卓球に関わっていた。ある日友人から、今回の研究のメールが届く。協力することにしたDさんは、大会について知りたかったのでホームページを検索した。すると、大会には日本トップの実業団や、関西のトップレベルの大学生が招待選手として来ることが分かった。特にその中でも、女子で日本トップのプロ選手であるM選手と、高校時代に地元が同じで県の優勝校に所属していたU選手の2人が来ることを知り、「これを生で見れるのはすごいなあ」と感じた。

試合当日、会場に着いてしばらく様子を見ていた。すると、既に試合をしているM選手を発見した。「おお本物や。」その場からM選手が見えやすい位置に移動した。初めてM選手を目の前で見て、洗練された動きやハイレベルなラリーに関心だけでなく、オーラの違いも感じていた。対戦相手は工科大生だったが、たとえ日本トップの大学生が挑んだとしても、プロの方が強いのだろうと思いながらM選手を見ていた。すると、別のコートでU選手の試合が始まった。「あ、懐かしいな。」高校の時以来に見て、顔や容姿に当時の面影を感じて懐かしんでいた。目当てにしていた2人の試合が同時に行われていたが、DさんはM選手の方を優先して見ていた。理由は、プロ選手でもあるM選手が、工科大生相手に最終ゲームまで纏れる接戦を繰り広げていたからだ。「ええ！？すごいな。」最終ゲームもデュースになり、16-16などにまで纏れこんだ。試合はM選手が勝利したものの、工科大生の思わぬ奮闘に驚かされた。

年末に自身も大会を控えていたDさん。招待選手だけでなく、勝ち残っている知らない選手からも、サーブからの展開や、足の動かし方などを学び、試合に対するモチベーションを高めていた。また、M選手やU選手を見れたことだけでなく、工科大生の思わぬ奮闘を見れたことにも満足した1日であった。

Dさんは今回の観戦を通じて、その競技の経験者ならではの洞察力を用いて観戦を行うことができたと考えられる。

そのため、Dさんにとってスポーツ観戦とは、「技術面における向上」のきっかけになりうる機会だった。

5-5 Eさんの事例

中学・高校で卓球をやっていたEさんは、同じ研究室である私の研究に参加することにした。当日、試合会場に着いてまず

はじめに目についたのは、打つ時に大きな声を出して試合をしている男子の選手だった。「なんか面白いな。」そう思いながら見ていた。次に目についたのは女子のカットマンだった。「うわ、カットマンや。」Eさん自身、中学生のときカットマンであったため惹かれたのだ。

しばらく経ってから、女子の準決勝のアナウンスが聞こえた。そこで初めて実業団のE銀行が来ていることを知った。それと同時に、M選手のことが頭をよぎった。M選手とは日本トップレベルの選手であり、Eさんは過去に彼女の試合の副審を務め、握手をしてもらった経験からファンになっていた。しかし、同日東京で世界選手権の代表選考会が開かれていることを知っていたEさんは「多分いてないやろなあ」と思った。そう思いながら女子の方に目を移すと、M選手の姿があった。(注：今回の代表選考会には召集されていなかったため)「ああ！いてるわ！」驚きと高揚感が瞬時に湧き上がり、M選手が見やすいところへ移動しようとした。しかし、男子の試合も見やすい位置を陣取った。なぜなら、身近ではあるが卓球しているところを見てみたいと思っていた私の試合が始まるうとしていたからだ。M選手を見ていると他の選手からは感じ取れない部分もあった。「勝つことが当たり前の上で、自分の技術を高めるためにやっているなあ。」M選手のプレーの合間に私の試合を見ていると、1ゲーム目は相手にリードされているのが見えた。しかし、M選手の方を優先して見ていると知らない間に私は逆転していた。「リードされても慌てる人じゃないんやな。」Eさんはそう思った。これは日常で会う時から想定していた私に対する人物像でもあった。

M選手と私の試合を目にしたEさんは、普段なら会うことのできない人を間近で見ることのできるワクワク、身近な人のまだ知らない部分を見れるワクワク、異なる2つのワクワクを体感していた。

Eさんは今回の観戦を通じて、Cさんと同様に2つの状況の中でも、他者の一貫性を見出し、その人物の理解を深めることができたと考えられる。また、自身が経験している競技のトップ選手とはどういうものかを知ることができたと考えられる。

そのため、Eさんにとってスポーツ観戦とは、「他者の本質を理解する」「本物を知る」きっかけになりうる機会だった。

5-6 Fさんの事例

小学生の頃からサーフィンが続いているFさん。今回、仲の良い友人に誘われて研究に協力した。卓球の試合は初めて生で見ることになるが、試合当日は、特に期待することもなく会場に向かっていった。会場に着いていくつかの試合を見て「遊びのレベルではないなあ」と思った。また、過去にテレビでカットマンを見たことがあったFさんは、実際にカットマンを目の当たりにしたことが少し印象に残っていた。しかし、1日を通して心が大きく揺さぶられるようなことはなかった。

後日、インタビューの時、過去にテレビでカットマンを見たときの印象について聞かれ「相手が速く打ってきている中であざ笑う感じがした」と答えた。カットマンにある、余裕感のようなものにかっこよさを感じていたのだ。Fさんはサーフィンをやってきた経験から、危険で大きな波にリラックスして余裕感のある感じで乗ることがかっこいいという感覚があった。これはカットマンを見たときに感じた余裕感、かっこよさと似たような感覚であった。

会場では気づかなかったがインタビューを通して、サーフィンとかけ離れた卓球の似通った部分を発見することができた。

FさんはAさんと同様に、別競技でも共通する認識を見出すことで、自身がどのような強みや特徴を持った人間なのかを理解することができたと考えられる。

そのため、Fさんにとってスポーツ観戦とは、「アスリートとしてのアイデンティティの強化」のきっかけになりうる機会だった。

6. 考察

被験者の物語から、以下のような図にまとめることができた。(図1)

図1より、6つの成長のきっかけの中から人間的成長という視点においては「アスリートとしてのアイデンティティの強化」「敬意を持ち対戦相手と向き合う尊さを学ぶ」「他者の本質を理解する」「本物を知る」という4つのパターンを確認することができた。

| 観戦者 | 対象のゲーム現象 | プレイヤーのパフォーマンス | 観戦の帰結 | 帰結が実現した理由 | どのような意味において成長のきっかけになりうる機会になったのか |
|-----|------------------|----------------------------|-----------------------|---|---------------------------------|
| Aさん | 関西のトップ選手 | 強そうと感じる関西トップ選手 | 自分の認識が正しかったと理解 | バドミントンと類似したトップ選手の共通点の発見 | アスリートとしてのアイデンティティの強化 |
| Bさん | 工科大生同士の試合 | 両者とも真剣 | 自分もこれからフットサルを頑張ろうと思った | 自身の過去の失敗と目の前の光景との対比 | 敬意を持ち対戦相手と向き合う尊さを学ぶ |
| Cさん | 友人の試合 | 逆転勝利 | 友人の魅力の再発見 | じらされたうえでの期待通りの友人の姿 | 他者の本質を理解する |
| Dさん | 勝ち残っている人達の試合 | 参考になる技術でのプレー | モチベーションの向上 | 経験者として自身にも参考になる学び | 技術面における向上 |
| Eさん | 友人の試合 プロ選手の試合 | 想定していた友人のプレー プロとしての試合内容 | 2つの異なるワクワクを体験 | 友人の知らない部分を知る可能性 普段なら見るができないものを見ることができる | 他者の本質を理解する 本物(プロ)を知る |
| Fさん | カットマンの試合 | 余裕感・かっこよさを感じるプレー | サーフィンと卓球の似通った部分の発見 | サーファーとカットマンの類似したかっこよさの発見 | アスリートとしてのアイデンティティの強化 |

図1

7. まとめ

齊藤（2009）では、観戦者は単なる傍観者ではなく主体的な作業を行うものであると重要視されていた。しかし、「するスポーツ」における人間的成長の概要についてしか明記されていなかった。

これに対して本研究では、「見るスポーツ」において観戦がどのような意味において観戦者の成長のきっかけになりうる機会なのかを明らかにすることができた。そして、具体的には4つのパターンを発見することができた。

また、本研究では「見るスポーツ」の一般的な研究対象であるプロスポーツではなく、アマチュアスポーツを対象としたことで、「見るスポーツ」の更なる発展につながる発見ができたと考える。

8. 引用文献

- 【1】スポーツ庁（2017）スポーツ基本計画
- 【2】齊藤隆志（2009）「みるスポーツの価値を高めるマネジメント」 体育・スポーツ経営学研究 第23巻：1-9